



発行所  
**富山県南米協会**  
 〒930-0096  
 富山市舟橋北町4-19  
 電話 076-441-6148  
 F A X 076-444-2179  
 北陸銀行県庁内支店  
 普通預金口座1098740  
 郵便振替口座00760-8-5145

---

No. 146

## と やまけんじんかいかん かいちくしゅうぜん ブラジル富山県人会館を改築修繕

### (1) 現会館の保有までの苦労

ブラジル富山県人会館は、サンパウロ市内の集合に便利なりベルダージ地区（東洋人街）のパンジア・カロージェラス通りにある。この会館の設置は、ブラジル富山県人会（1960年設立）の発足以来20年の夢であった。ようやく1981年に、当時の長森信雄会長（在位10年）らの熱い努力と母県に対する支援要請が実り、富山県及び富山市・高岡市から合計3千万円の支援を得て、実現にこぎつけたものである。

会館は、既存の2階建て住宅を買収して改装のうえ、県人移住者の親睦・交流の拠点としてスタートした。その後、施設に小さな集会場や図書室を兼ねたホールを増築して、各種行事にも利用されてきた。

### (2) 老朽化し使い勝手が悪い

しかし、約40年を経て今日に至り、①建物の老朽化及び設備の劣化が著しいこと。②中古物件に部分増築した現建物は、当初から手狭でかつ使い勝手が悪いこと。③県人会が活発になって行事（新年会、総会、敬老会等）の参加者が増加したことにより、建物外に参集者が溢れ、集会が分断されてしまう一などの問題が、次第に深刻になってきた。

### (3) 事業資金の確保

このため、同県人会（市川利雄会長）では、2018年に同会館の改築修繕事業の着工を決め、事業費は、県人移住者からの寄附を募る一方で、不足する資金について上記の母県3団体に対し再び助成を要望することにした。

昨秋、市川県人会長が来県の際、県庁に石井知事を表敬訪問し、最近の活発な県人会活動の報告

と併せて同会館の改築修繕の必要性についても、実情を訴え、さらに富山市及び高岡市にも足を運び、助成をお願いされた。

### (4) 現地との交流

因みに、これら地方自治体においては、遑れば、富山県がサンパウロ州との友好提携(1985年)、富山市はモジ・ダス・クルーゼス市と(82年)、高岡市はミランドポリス市との姉妹都市提携(74年)などを通して、ブラジルとの交流に実績がある。

県出身者は、1908年に県人3家族が初移住して以来、戦前(1536人)、戦後(322人)の計1858人が移民第一世として渡航し、ミランドポリス市郊外の第3アリアンサ(富山村)入植から90年余を経過している。モジ市には不二越が進出し、聖市郊外ソコカバにはYKKが企業展開している。

県はこれまで約250名のブラジルからの県費留学生、海外技術研修員等を受入れる一方、現地の日本語・日本文化の維持普及のため、教員(県、高岡市各1名)の派遣やサンパウロ大学に奨学金支給などに努めている。その成果で日本で学んだOBが立山フレンド会を結成して県人会の後継者として活動している。富山市は廃棄物処理等でモジ市と協力し、高岡市は少年の相互派遣訪問を行うなど交流が進んでいる。

### (5) 改築修繕事業に助成

上記3団体では、県人会の活性化と交流の発展に資するため、県人会の要望に応じ、事業費565万円の6割相当を共同して助成することとなった。そして、富山県南米協会も助成の一部を負担するため、新年度の事業・予算の中において、理事会・総会に諮ることとしている。工事は年内に完成する予定である。

# は けんきょういん しょうかい 派遣教員の紹介

にほんごがっこう 派遣職員 なかむらけん たろう  
アリアンサ日本語学校 派遣職員 中村健太郎



この度、ブラジルのミラ  
ドポリス市第3アリアンサ日  
本語学校に赴任する中村健太  
郎です。長い歴史のあるこの  
派遣事業に参加させていただ  
くことができ、大変うれしく

思っております。

富山県からの派遣としては私で21代目となり、  
富山県と JICA (国際協力機構) との共同事業と  
なってから初めての長期派遣となります。現在は、  
7月からの派遣へ向け JICA 横浜にて語学やボラ  
ンティアに関わる講座の学習に努めています。

富山では中学校教員として6年間、社会科を教  
え学級担任も務めてきました。以前から海外での  
ボランティアに興味があったことや帰国子女の生

徒との出会い等から、今回の派遣事業への参加を  
決めました。まだ派遣までにもう少し時間がある  
ので、アリアンサのことを勉強したり、富山の良  
さを伝えるための資料作りをして、派遣を楽しみ  
にしながら、準備していきたいと思ひます。

これからもよろしくお願ひいたします。

# ミラドポリス市高岡日本語学校 派遣教員 子吉 佑



今年3月まで高岡市志貴野  
中学に勤務した。

高岡市役所を訪れた際に  
「日本語学校の教師になるの  
が夢だった。現地では日本や  
高岡のファンづくりにも取り  
組みたい。」と、高橋正樹市長に抱負を語った。

高岡市からの教員派遣は、1993年に始まり11代  
目の子吉先生は、2020年3月まで2年間の予定。

# くろべしちょう おおの ひさよしし はつとうせん 黒部市長に大野久芳氏が初当選

任期満了に伴う黒部市長選は、4月15日(日)投票  
が行われ、保守系の無所属新人3人(いずれも自  
民党員)による三つどもえ選挙となった。即日開  
票の結果、前県議の大野久芳氏(69歳) = 同市生  
地 = が、9480票を獲得して初当選を果たした。

黒部市は、2006年に宇奈月町と合併し、これま  
で堀内康男氏(合併前の旧市長に04年就任、さら  
に合併後3期14年間)が市長を務めた。この間に  
新幹線駅の周辺整備や市庁舎の新築など礎を築く  
施策を実現したが、昨年の市議会12月定例会で市  
長選に出馬しないことを表明していた。

当選した大野氏は、堀内氏の支援を受け、黒部  
市の将来都市像や堀内市政を継承・発展させる考  
えを示した。市政の推進目標を「健やか、展やか、  
朗らか」として掲げ、健康寿命の延伸、子育て支  
援の充実や、めりはりのある安定的な財政運営を  
進めるとアピールし、幅広い層から支持を集めた。

他方、次点になった前市議の川上浩氏(62歳)  
= 同市宇奈月浦山 = は、市政が大型事業に傾注し、

借金が増らんとし、身の丈に合った財政運営  
に切り替え、「生活幸福度」の向上を主張したが、  
1000票余の差で及ばなかった。

また、前市議の川本敏和氏(60歳) = 同市天神  
新 = は、地域が家族のように支え合う「家族市民  
のまち」を目指すとして、若者の定住促進や雇用推  
進を訴えたが、支持を広げることができなかった。

なお、当選した大野氏は、旧黒部市議2期を経  
て、1999年から県議を5期務め、議長などを歴任  
した。大野市長の任期は4月23日から4年間。



# ポルトガル語教室 受講者募集

会場	区分	開講日等	申込先・問い合わせ先	教材費等実費
富山教室 富山県南米協会 TEL / FAX 076-444-7679	入門	5月15日(火) PM7:00~8:30 以後 毎週火曜日 (全28回)	富山県南米協会 TEL 076-441-6148 FAX 076-444-2179 E-mail toyama-nanbeikyokai@sepia.ocn.ne.jp toyamananbei@gmail.com 〒930-0096 富山市舟橋北町4-19	年間 10,000円
	初級	5月18日(金) PM7:00~8:30 以後 毎週金曜日 (全28回)		
高岡教室 高岡市国際交流センター(研修室)	入門・初級	5月15日(火) PM6:30~8:00 以後 毎週火曜日 (全24回)	高岡市国際交流センター TEL 0766-27-1856 FAX 0766-27-1858 E-mail kokusai@pl.tcnet.ne.jp 〒933-0029 高岡市御旅屋町101 御旅屋セリオ7階	年間 13,000円 (高岡市国際交流協会会員は 11,000円)

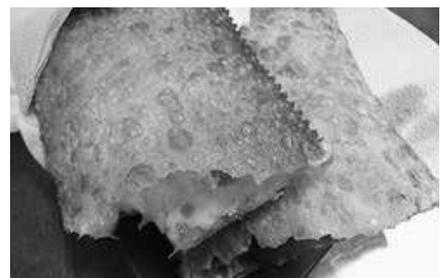
## ポルトガル語教室で一年の修了パーティー

年度末に赤沢省三先生から年間70%以上出席した受講者に修了証が渡されました。3月30日(金)には、いろいろ学んだことを振り返りながら、一品持ち寄りで楽しく会食しました。

赤沢先生は、ブラジルの代表のおやつ「パステウ」を自宅で作ってきてくださり、会館の調理場で揚げ、皆ができたてのアツアツを頂きました。「パステウ」は、四角で大きい揚げ餃子のようなものです。とても美味しく「また、次回もお願いします。」と、リクエストが出るほどでした。

ポルトガル語は、男性名詞、女性名詞があり、それにより冠詞や動詞が変化するし、時制も多いし、覚えることがいっぱいですが、単語や忘れていることをあまり気にせず、気長に何回もやって覚えていきましよう。

みなさん、ポルトガル語を習ってみませんか？



パステウ



修了証の授与



修了パーティー

## 移住百年の高崎三郎氏の孫6名が来県

4月14日(土)、翌日の立山黒部アルペンルートの開通日に合わせたブラジルからの日本ツアーの一行として、百年以上前に移住した県人の子孫家族が先祖の墓参りのため、出身地に立ち寄った。

1914年に上新川郡大田村(現富山市大場)から兄の太一郎夫妻に伴われて、渡航した高崎三郎さん(当時14歳)の孫であるホジウダ・タカサキ・クルシーノさん(女性)ら4家族6名(4名は従姉妹、うち夫婦2組)が、団体バスツアーと別行動で、実家のある大場を訪れた。前泊の岐阜県下呂から途中のJR高山線沿線の景色は、遅咲きのサクラが満開であったという。

富山駅では、有志の北林吉之さん(旧コラソン・ド・ブラジル経営者)、マルセロ吉村さん(県国際交流員)及び橋秀雄事務局長が出迎えた。早速、北林さんが用意した9人乗り新車で、常願寺川の河畔集落の大場に向かった。所用のマルセロさんは日中別行動で、夕方に再会した。

大場の高崎宅では、既にサクラの花が散り葉桜の季節で、稲作の水田をトラクターで耕す繁忙期にかかっていた。見渡せば敷地内には、1992年にホジウダさんが父や叔父家族らと初来県の際、カイニョウ(防風用の屋敷林)に記念植樹したスギの木が四半世紀を経て大きく育っていた。一行は、在住するパラナ州クリチバから持参したお土産等を手渡した。



お土産の中には、同国で有名なバーラ・デ・バナナ・アントニーナというお菓子(バナナ・キャラメル)があった。訪問者の中にホジウダさん同様、単身で高崎三郎さんの孫にあたるアナウジーナ・コヘアさんが同行した。彼女は、その銘菓を生産するソテール工業(Industria Soter)の創業者一族に嫁ぎ、現経営者である。

他には夫婦同伴で、ジョジアーネ&ヴァルミール・フェハリー夫妻及びナージャ&ジョゼー・カールロス夫妻が来県した。女性4名全員のミドルネームには、いずれも Takasaki がある。

そして、実家から100m南方にある高崎家先祖の新築の墓に案内され、献花し墓参することができ、一行は大きな感激に包まれた。

大場の実家を辞し、昼食は話のタネに回転寿司に案内した。魚を生で食する習慣がない女性もいたが、野菜や納豆巻きは食べることができた。寿司店の雰囲気と注文したお皿が新幹線の模型に載せて運ばれてくる珍しさに驚いていた。

その後、呉西方面に車を走らせ、新湊大橋を渡り海王丸パークで散策した。曇り空にかかわらず立山連峰が姿を現し、しばらくの間、絶景に見られていた。

夕方、富山市内のホテルで6人はツアーに合流した。残念ながら、翌朝の悪天候のため、開通日の山岳一帯は、積雪になり、雪の大谷を含む観光ルートが閉鎖された。伯国から人気のツアーは、止むを得ず博物館等で時間を調整し、北陸道経由で長野県大町に向かった。

